

保育の見直し四年目一学期

— 保育の第二ステージに —

入江 礼子

保育の見直し四年目に入る

早いもので保育の見直しを始めて四年目に入つた。昨年九月には園舎が元の大学の講義棟だった建物の一、二階部分を改築したところに移転した。昨年度はそのため八月に引越し、九月からは二階建ての新園舎での生活となり、「保育の見直し三年目」（本誌第一〇二巻第十一号）にも書かせていただいた

た保育者の仕事が減らないという状況は全く変わらないか、あるいは変わらないどころか環境の変化も加わって忙しさが極に達した状態で一年間を終えたという結果になってしまった。

今年は昨年保育を共にした保育者がすべてそのまま残った。保育の現場としては初めて、全員が昨年の保育経験の上に今年分を積めるという状況になったわけである。もしかすると訳の分からない忙しさ

は減るかもしれない。そんな期待も抱けそうではあった。新任の保育者は二人。三歳児の担任と、未就園児クラスの担任である。クラスは一クラス増え、三歳児、四歳児、五歳児とも二クラスずつとなった。園児数は昨年七〇余名から一〇〇名に増えた。

一本の電話

初めて二階建ての園舎で迎えた一学期。保育者の緊張と子どもたちが園の生活に慣れるまでの過程は想像以上に起伏の多いものであった。特に今年人数が増えた四歳児クラスの一学期は混沌と、そこから湧き出るエネルギーが渦巻いた生活となった。

それは入園式直前の一本の電話から始まった。電話の主は四歳児クラスに入園予定の子どもの母親だった。「どうして自分の子どもだけ進級児がほとんどのクラスになったのですか？ 昨日そのことを

耳にはさんで以来、子どもも私も不安でいっぱい、昨晩は眠れませんでした。社宅の同い年のお子さんは皆新入園児で構成されたクラスに入っているというではありませんか。何故うちだけが……。入園式が始まる前にぜひクラス替えをお願いします」。心配と落胆と不信と……。そんなことがない交ぜになった言葉が次々と私の耳に飛び込んできた。

クラスの編成

始業式を入園式の一日前に行なう私たちの園はその時に全てのクラスの名簿を発表する。電話をかけたきた母親は既に園に通ってきている子どもたちの母親からその話を聞いたという。入園式直前の慌しさの中、私は三〇分受話器を置くことができなかつた。

今年度、四歳児は進級児十九人、新入園児二十七人という構成であった。今回は特に二年保育で四歳児として入ってくる希望者が多く、さらに加えて新

入園児は早生まれが半数以上という状況だった。この状況を考えて、クラスを決定する際に、どういう組み合わせにしたものか大いに悩んだ。入園式になり直前まで組み合わせは二転三転した。進級児と新入園児がほぼ半数ずつであればクラスもその割合を半々にしようか……。初めはそう考えた。しかし昨年度の三歳児のクラスは生活の上でも遊びの上でも積み上げてきたものがあつた。それに進級児は進級当初、どちらかというハイテンションの新入園児に押されがちである。それぞれの状況に応じたクラスにしたい。そして最終的には進級児に統合される形で新入園児が混ざり少しでも園での歴史が積まれるようにしたい。こんなことを考え、結論として進級児のクラスと新入園児のクラスを別にして始めることにした。

そのときに困ったことが一つあつた。それは新入園児の人数が八名多く、このうち四人を進級児のク

ラスに入れなくてはならないことだ。不公平感なくクラス分けをするのは至難の業であつたが、やらなくてはならない。悩んだ末に兄、姉が園に通っている人は園に少しは慣れているということで、まずこのクラスに入れる。それが二名。後の二名をどうするか。男女比で男児の数が少なかったので、あいいうえお順で男児二名に入ってもらふことにした。かなり苦しい決定であつたが、このクラスの保護者が園の方針に協力的であることに加えて、昨年度ハンガリーからの一時帰国をした親子に対して、子どもたちもまた保護者もとてもオープンで温かく迎えてくれたという実績もあつたことからこの決断となつた。それが冒頭の保護者の不安を呼んだのである。結果は入園式の直前にもう一度、今度は父親にこの経緯を話し、園としてはこの方針でいくことを再度伝えた。父親は自分としては納得のできないクラス編成ではあるが、あとは子どもが不安にならないよ

うにしてほしいということで一応の決着をみた。

オーブンクラスゆえの悩み

新園舎は学年二クラスが一つの空間で生活するよう設計されている。三歳児は全体で十一名、十二名の二クラス、四歳児が先程も述べたように二十三名、二十三名の二クラス、五歳児は十五名、十六名の二クラス。各学年の二クラスがオーブンクラス形式の保育室で生活する。三歳児と五歳児は二クラスであつても一クラスと言つてもよい程の人数なのでオーブンクラスで生活するのにもさほど差し支えはなかつた。大変だったのは人数が増えた四歳児である。始めから四歳児四十六人が全く仕切りのない空間で生活するのは難しい。そこで間仕切り用の一二センチメートルの高さを持つ間仕切り棚と天上からカーテンを下げることでクラスを二分した。保育室としては狭くなつたが、新しい生活が軌道に乗る

まではこの方が落ち着くかもしれないと考えてのことだつた。

クラスの仕切りを取るまで

こうして今年度の生活が始まつた。四歳児の新入園児のクラス担任は昨年三歳児を担当した経験六年目のT先生。立場としては学年全体を見渡す役割を持つてもらつた。進級児のクラス担任は昨年四歳児を担当した経験二年目のA先生。この二人がチームを組んで始めた。

四歳児クラスは二階にある。これが担任たちの頭を悩ませた。人数も昨年の倍近い。時には半強制的に子どもたちを園庭での遊びに誘うこともあつた。

新入園の子どもたちも今年は四月からよく遊んだ（この当たり前のことに私はこの園に来て年月が経つたことを思った。思えば「なにしたらいいの」「まだ遊んでいていいの」と聞いてくる子どもたち

がいたことが嘘のようだ。この三年間の積み重ねの中で、「幼稚園ではいっぱい遊ぶ」ことを是とする保護者が選んできてくれていることを思う。その勢いに押されてか、進級児の元気が今一歩だった。いつも遠慮している感じと言った方がいいのだろうか。こういうことのないようにと考えたクラス編成ではあったが、自由に遊ぶ時間の多い私たちの園ではその時間に昨年自分たちの担任だった先生が新しい子どもたちと遊んでいる姿を見て身を引いているのである。五月半ばに入り、全体的に子どもたちが半分に分けた保育室の活動では物足りなくなっているのを見て、予想よりだいぶ早くではあったが、二クラスを隔っていた棚とカーテンを試験的に取り外してみることにした。まずその仕切りの三分の一を開けた。すると面白いことが起こった。仕切りを取った保育室でも昨年N先生が担任だった子どもたちが大挙してN先生のクラス側になだれ込んで

きて遊んでいった。それも三歳児クラスのときに本当によく遊んだ大掛かりな「お医者さんごっこ」である。また、N先生が園庭で遊んでいるときのことである。「Nせんせい！」と進級児の一人が元の担任を呼んだ。するとそれに気づいた他の子どもたちも「Nせんせい！」と走りよった。「先生と遊んでいいの？ ぼくたち山組だし、先生海組だけど、ほんとにいいの？」こんなふうを考えて今まで子どもたちは前の担任に声をかけることを遠慮していたのだということがこのとき初めてはつきりと分かった。これらの様子を見て担任同士は話し合い、次の週から仕切りは全面的に廃止することにした。進級児にぎこちなさが取れていくのにそれほどの時間はかからなかった。

大きなクラスになって

こうしてクラスの仕切りは取り外されたわけだ

が、今度はまたもう一つ大きい問題が待っていた。それは四十六人という人数である。それまでは仕切りがあつたので二十三人ずつ分かれて「お弁当の時間」や「帰りの集い」を持つことができた。それが四十六人では果たしてどうなるのか。「ともかくやってみよう！ それで失敗したらまたそこから考えよう！ 前向きにやってみよう！ 前向きにやってみよう！」とちよつぱり悲壮とも思える担任たちの決意がそこにはあつた。

しばらく様子を見てみると、進級児は仕切りが取れたことでゆつたり感が増し、新入園児との関わりも徐々に増えていった。新入園児はこの状況にスムーズに溶け込めた人が大半であつたが、なかには人数が多くなつたことに伴い、不安定さを増す子どもたちも出た。「帰りの集い」のときなどは楽しめるときは二十三人クラスのとときよりもより高い集中度を得ることもあつた。しかし全体に騒がしくなつ

てしまふときはその騒がしさも並ではなかつた。そこでクラスの環境はオープンクラスにして半分はプレイルームで、残りが保育室で「帰りの集い」を持つなど工夫を重ねた。しかし六月に入るとそのペースもつかめてきたのか、落ち着いて遊びの時間には自然な交わりが、またお弁当の時間も賑やかにすごることはあるものの、楽しんで過ごす姿が見られるようになった。

保護者への説明

こうして人数の多い四歳児クラスもオープンクラスで生活する基盤はできたわけだが、一学期という子どもだけではなく保護者もまだまだ不安の大きい時期だ。今後このクラスの経営を安定して行っていくためには多少骨が折れることではあつてもしっかりと保護者に説明していくことが大切であることがこの三年の経験で割り出されていた。そこでクラスの

仕切りを取ってすぐに、まず毎週出しているクラス便り子どもたちの様子と仕切りを取るに至った経過と意図を担任が書いた。すると子どもたちからその様子を聞いて何で今そのようなやり方に変化させるのかと疑問に思っていた保護者からの連絡帳に「先生の意図がよく分かり安心しました」と書かれていた。「このところ、自分のクラスだけではなく、お隣のクラスのお子さんの名前がよく出てくると思っていたのですが、その理由はこういうことだったのですね」「うちの子どもは何も言わないので幼稚園での変化が分からないのですが、お便りを読んで、どんなことが起こっているのかよく分かりました」というような反応があった。

園長・副園長との懇談会で

その後毎月恒例の学年毎の園長・副園長と保護者との懇談会でこの変化を取り上げることにした。

四年目に入っても続けている月一回のこの懇談会

の雰囲気は今年になってその和やかさが急速に増した。それは一つには私たちがこの園に就任し、現在の保育方針を打ち出してから入園を決めた保護者ばかりになったということもある。初めての年のように何でもかんでも変化に見えることには全て反対というようなあり方は全くと言っていい程なくなってしまった。それは四歳児の保護者との懇談会も例外ではなかった。この懇談会、昨年までは自由参加であったが、今年からは三歳児の保護者との懇談会は通年で毎回出席が原則とし、四歳児は一学期間は出席が原則、その後は自由参加、五歳児は自由参加という形式に変えた。園での出来事はなるべくオープンに、そしてこちらの意図をしっかりと伝えていくためには三歳児から入園してくる保護者との信頼関係や保育方針に対する理解の深さが「核」になると考えらるからである。

今回の四歳児の保護者との懇談会では二階建ての園舎に移転したり、人数が増えたりという状況の変化

もあり、昨年度まで積み上げてきたことをそのまま継承するには変化が大きすぎた面もあり、一学期の前半の四歳児のクラス経営が試行錯誤の連続であったことを正直に伝えた。そしてその中から私たちが考えている子どもたちの中に育つものの見直しもまたしつかり話した。保護者からは次々に園での変化があつてからの子どもたちの家での様子が語られた。特に大きかったのは子どもたちの混じり合いが増えたことで、自分のクラス以外の子どもたちの名前が出るようになり、そのことがきっかけで母親同士が知り合うチャンスが増えたというものであつた。今までであれば、必ず負の面がいつばい話された。今回はそれが殆どなかったということになる。これは喜ぶべきことか、あるいはそうでないのか。ここでまた私たちには一つの課題が与えられた。考えてみれば今までは保護者との葛藤状況の中から、それを越えるべくいろいろな工夫や取り組みもしてきた。保護者の反対意見の中にはそれをそのまま鵜

おわりに

何とか自分たちの保育を分かつてほしいと思つて今まで夢中で突き進んできたが、四年目に入り、今までだったら非難囂々の状況でも批判が殆どでなくなつてしまった。保育が第二ステージに入ったことを思うと同時に、葛藤が余りないといういわゆる「平和時」に自分たちがマンネリに陥らないようにするためにまたあらたな知恵がいると感じるこの頃である。

(鎌倉女子大学)